

(論 文)

小学校教員免許履修学生が考える英語学習動機付け —動機付けストラテジー質問用紙からの考察—

アスコー朋子

キーワード

小学校英語教育 学習意欲 動機付けストラテジー

1. はじめに

教育現場はもちろんの事、ビジネスにおいても行動の原動力になる「動機づけ」「モチベーション」「やる気」が重要視されている。「やる気」が社会的にも前向きで積極的な意味に受け取られ「やる気」があることは社会的にも有意義であるとする傾向がある。英語教育においては、学習者の英語運用能力だけではなく、モチベーションアンケート等を使用し、学生の英語学習に対する熱意を考慮し、語学クラス分けに用いられたりする事さえもある。

英語をどのように学習したら早く上達するのか等々多くの書物が書店に並び、効果的英語学習法、指導法など教員間で議論が絶えないが、学習者にどのようにやる気を起こさせ、維持するかが、英語をどのように学ぶのかよりも大切だと考える教育者・研究者も多い。

この様に、学習成果を出す上で非常に重要な動機づけだが、特に近年、学習意欲が低い学生が増加傾向にあり、どのようにして学生にやる気を起こさせたらよいかについては教員の経験に基づく様々な方策(ストラテジー)を講じて来ているが解決策はまだ見いだされていないようだ。本来「動機づけ」は心理学の領域だが、英語教育のコンテキストにおいて、どのような時に、英語の学習意欲が高まり、またその学習意欲を維持させられるのだろうかを探り出し適切なストラテジーを英語教育に用いる事は今後の大きな課題の一つと考えられる。

本研究は、動機づけ、所謂、何が行動を起こさせるのかという途轍もなく大きな難問に挑戦するのではない。心理学、教育心理学、応用言語学の領域で研究されて来た動機づけ理論を元にドルニェイ(1994)が、提唱した個人の目標関連行動を促進する35の「動機づけストラテジー」のうち、小学校教員課程履修学生の英語学習動機、及び学生が考える学習意欲が上がると感じられるストラテジーの思索を試みる。

2章では、モチベーション理論を心理学的、応用言語学的に概括し、そして動機づけストラテジーを見ていく。次に2章の研究では、研究手法、研究参加者、3章では結果を提示し、4章では動機づけ理論を枠組みとし有効なストラテジーの考察を行い教育的な示唆を試みる。

II. モチベーション理論

モチベーション (motivation) の語源をたどれば古フランス語 motif、もしくはラテン語 motivus、move という意味である。何かの目標を達成する為に、行動の方向付けをして、行動を起こし、その行動を支え維持する、と言う意味である。モチベーションは心理学、社会心理学、教育などの研究分野で広く研究されている。

ここでは、モチベーション研究の基礎になる心理学的理論、次に英語学習に直接関わる教育学的モチベーション理論の概要、動機づけストラテジーを概観する。

2.1. 心理学的動機付け理論

上淵 (2007) によると、動機付けは、3つの要素：認知 (cognition) 「当人の主観的解釈」、情動 (emotion) 「情動体験」、欲求 (need) 「人を行動に駆り立て、その行動を方向づけるような比較的安定した心理的エネルギー」 (p.4) に分ける事ができる。

ここでは、この3つのカテゴリーを元に心理学的モチベーション理論の概要をみることにする。

2.1.1. 認知的動機づけ

認知論的にモチベーションを考えると、行動する、もしくは行動しない人間を「意味づける主体¹⁾」として捉える。

動機づけと言うと、誰しもが考える「目標設定」であるが、1968年にエドウィン ロックが提唱した「目標設定理論」(goal setting theory) は目標設定の仕方によってモチベーションの違いをもたらせる、と言う考え方である。曖昧な目標より、明確な目標の方が達成し易く、また難易度の低い目標より、難易度の高い目標の方が達成し易いと言う。

もう一つの代表的な認知論的アプローチは Eccles and Wigfield (1995)、Brophy (1999) などが提唱した行動する対象物に何らかの期待を持ち、価値を見いだす「期待価値理論」(Expectancy-value theories) である。努力が成功へ結びつく期待、並びにタスクを成功される事に不随する価値をどのように見いだすかである。

タスクの達成ニーズ、成功期待、誘引値、失敗への不安などを動機づけの構成要素として、Atkinson and Raynor (1974) は達成動機づけ理論 (Achievement motivation theory) を提唱した。タスク、目標への接近傾向と回避傾向の方向と力関係によって、決定される。

Bandura (1997) は、認知された自己の能力を動機づけの要因とし、「自己効力感理論」(Self-efficacy theory) を提唱した。この理論によると、自己効力感は、主体があるタスクを遂行する能力があるかどうか判断し、その判断に基づきタスクに取り組むか取り組まないか決定する。

また、Covington (1998) は自己価値を動機づけの主な構成要因とし、自己価値理論 (Self-worth theory) で、人間は自己の価値観を高めようとする方法で、行動を決定するとし、この価値が脅かされるとその自己価値を守る為に行動する、と考えた。

2 動機づけには過去においての成功、失敗体験が大きく起因していると Weiner (1992) は、帰属理論 (Attribution theory) を提唱した。過去においての成功、失敗がその個人の能力と関わっていると考えるか否かにより、次の行動を開始する動機づけに大きな影響を及ぼすと考えられる。

2.1.2. 情動的動機づけ

期待と価値を見だし目標行動する主体は、「うれしければ活動的になるし、落ち込むと何事にも消極的になる。……「感応する主体」(上淵 2007, p14) とも考えられる。

情動、もしくは感情の生き物の主体は、何かに没頭しているとき、最大の能力を発揮しパフォーマンスが最大化すると考えられる。好きな事を夢中に無条件に行い、どのような困難をも乗り越え、努力を惜しまず取り組んでいるうちに、目標達成した、もしくは上達した経験は誰しもが持つことだろう。これを理論化、体系化しCsikszentmihalyiは「フロー理論」(Flow theory)を提唱した。

Goodman & Friedman (1968) は、他者と自分は公平に評価されているかどうか、がモチベーションに影響が出てくると、アダムスが提唱した公平理論をグッドマン&フリードマンが検証研究をおこなった。労働と報酬のバランスが他者と比較した場合、経験上で公平に評価されていることが動機づけに繋がるとした。

2.1.3. 欲求論的動機づけ

上淵(2007)「欲求とは、人を行動に駆り立てる一種のエネルギー体であり、そのエネルギーの量によって、行動の出現頻度や強さは異なってくる」(p.21)が述べるように、欲求と行動には密接な関係がある。モチベーション理論のなかで代表的な一つのモデルにマズロー(1954)欲求5段階説がある。人間の欲求を下から、生理的欲求、安全の欲求、社会的欲求、尊厳の欲求、自己実現の欲求に分類した。下位の欲求が満たされると次の上位の欲求を満たそうと行動をとるという仮説を説いた。

内面から湧き出る好奇心を満足させる為に行動を起こす内発的動機づけに基づいてDeci and Ryan (1985) は、自己決定理論を提唱した。また、有能さへの欲求、関係性への欲求、自律性への欲求を人間が持っている欲求としている。

2.2. 第二言語習得における動機づけ理論

2.1で心理学的に動機づけ研究の代表的なモデルを言及したが、ここでは第二言語(L2)分野における動機づけの主流のアプローチを概観する。

2.2.1. ガードナー、ランバートの第二言語習得分野アプローチ

L2分野動機づけのパイオニア的存在の研究者ロバート・ガードナーは、L2教育を単に外国語を教えるだけの教育ではなく、目標言語の文化をも同時に教えるものである、と言っている(Gardner 1979)。その論文のなかで、言語習得とアイデンティティとの関係にも言及している。

二つの国際語：英語とフランス語の二言語使用地域であるカナダで行われたガードナー／ランバード(1972)は、L2社会に対する態度がL2習得成功に大きく関わっているとした。また、言語学習者の動機づけは2つのカテゴリーに分かれると仮定する。

一つは統合的志向(integrative orientation)目標言語の社会成員、類似した存在になることを希望する。道具的志向(instrumental orientation)は、L2を習得することにより、更に良い仕事や高い給料を取るための実利に関連する動機付けである。

3

2.2.2. ドルニエイの第二言語動機づけ枠組み

ドルニエイ(1994)のモデルは、L2動機づけを、言語レベル、学習者レベル、学習場面レベルで説明する。

言語レベルは、言語と文化、社会、知的・実務的価値の関連した要素を表している。

学習者レベルは、学習過程に影響を与える学習者としての自信(言語使用不安、知覚しているL2能力、原因帰属、自己効力感)や目標言語の達成ニーズを表している。

学習場面レベルは、授業特有の動機づけ要素（授業に対する興味、教材、ニーズに対する授業の関連性、成功の期待感、成果への満足感）、教師特有の動機づけ要素（教師の人柄、教育方法など）また集団特有の動機づけ要素（集団の目標指向性、規範と報酬システム、集団結束性、教室内在が協力的なのか、競争的なのかもしれない）を表している。

2.2.3. 動機付けストラテジー

Dörnyei (2001) で動機づけストラテジーを“motivational influences that are consciously exerted to achieve some systematic and enduring positive effect” (p.28)「体系的でポジティブな効果が長続きする為に意識的に与えられる動機づけの影響」と述べている。

表1は動機づけを高める指導実践モデルである。主要なカテゴリーは、動機づけの為に基礎的な環境を作り出す、学習開始時に動機づけを喚起する、動機づけを維持し保護する、肯定的な追観自己評価を促進する、の4つである。

この4つのカテゴリーを元に動機づけストラテジーアンケートは構成されている。

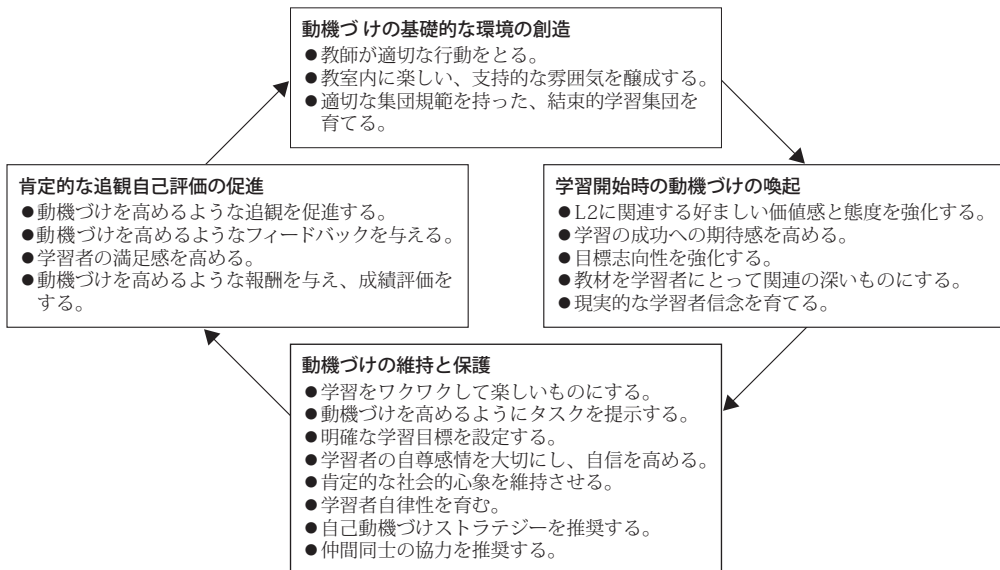


図1 動機づけ指導実践（ドルニエイ 2005より引用）

以上心理学的、応用言語学的の両分野から英語学習の動機づけに関連していると思われる理論を簡単にみてきた。上記を理論的枠組みとし、以下の研究の問いを立て検証を行なう。

4

2.3. 研究の問い

1. 小学校教員免許履修学生の英語コミュニケーションレベル、留学経験、英語学習動機を把握する。
2. 本研究参加学生はどのような学習動機付けストラテジーが学習意欲を高める・維持する為に役に立つと考えているのか。
3. 有効と考える学習動機ストラテジーは英語能力の高低によって動機付け及び動機付けストラテジー使用は異なるのかどうか。

Ⅲ. 研究

3.1. 予備調査

予備研究 1

本調査に先駆け、平成24年後期に、ドルニエイの英語指導（動機付け）ストラテジーを用い、学生・教員両サイドから英語の学習意欲向上・維持になにが必要か検証する本研究の事前調査としてのパイロット研究を実施した。研究参加者は埼玉県A大学学生29名、神奈川県B大学学生41名に学習意欲が上がると思われるストラテジーをリッカードスケールで選択してもらい、教員7名には重要と考える、および指導に取り入れている・取り入れる予定のストラテジーを回答してもらった。A大学学生は、内発的な動機づけが余り見られず、教員に褒めて欲しい、教員から努力のフィードバックが、学習意欲が上がるなど、言葉による報酬が動機づけに有効のようである。一方B大学学生は、教員との関係よりタスクの知的好奇心を刺激し挑戦的な面白さが学習意欲を向上させる、と回答している。参加教員が重要視し、尚かつ指導に取り入れているストラテジーは、生徒の一人一人を気に掛ける、外国語は目標達成に役に立つ等目標設定と到達に関するもの、間違えを恐れのない、タスクの面白さなどである。学生が学習意欲に役に立つと考えるストラテジーと教員の指導ストラテジー間には共通点も相違点も見られた。

予備研究 2

予備研究1を元に研究参加学生は埼玉県私立大学生435名、及び参加教員 教員34名に拡大し以下の3つの研究の問いを立て英語学習動機付けを高める指導法を学生と教員の両サイド動機付けストラテジー質問用紙から考察した。

1. 本研究参加学生はどのような英語学習動機をもっているのか。
2. 本研究参加学生はどのような学習動機付けストラテジーを学習意欲を高める・維持する為に役に立つと考えているのか。
3. 教員がどのストラテジーを重要視し、そのストラテジーは学生が重要としているものと一致するのか。

結果はクラス環境、努力に対する評価と励まし、効果的な学習法、クラス規則、そして教員との良い関係の順に学習意欲が高まると示している。教員も学生とほぼ同様だが、一点異なることは、教員との関係を「クラス環境」に含め、動機付けに1番重要なストラテジー群に含めていることである。

学生が学習意欲が高まると考えているが、教員が行っていないストラテジーで顕著な違いがあった「上級生や仲間の良いお手本や体験談を話してもらう」「進歩に対して報酬をもらう」「クラスで作成した規則を皆でまもる」この3つを授業に取り入れていくことが動機付けに繋がると示唆している。

3.2. 本研究

3.2.1. 研究手法

実施時期

平成27年9月～12月 実施要領を記載した「アンケート調査お願い」と質問用紙配布を研究協力教員に依頼し回収した。

質問用紙

ドルニエイ（2005）の動機付けの基礎的な環境を作り出すストラテジー、学習開始時の動機付

表 1

問 1～4 の基本統計量（相対度数）

		全体(n=714)	埼玉(n=413)	千葉(n=301)	中央値(全体)
問 1 (性別)	男性比率	15.7	27.1	0.0	—
問 2 (学年)	1 年	38.8	50.6	22.6	2 年
	2 年	22.7	23.5	21.6	
	3 年	23.7	19.6	29.2	
	4 年	14.8	6.3	26.6	
問 3 (英語コミュニケーションレベル：英検換算)	4～5 級	15.4	13.3	18.3	3 級
	3 級	51.7	58.6	42.2	
	準 2 級	28.0	24.0	33.6	
	2 級	4.8	4.1	5.6	
	準 1 級以上	0.1	0.0	0.3	
海外経験 (英語圏)	無し	62.6	67.3	56.1	無し
	1 か月以下	31.5	27.4	37.2	
	1～6 か月未満	3.2	2.7	4.0	
	0.5～1 年未満	1.1	1.0	1.3	
	1 年以上	1.5	1.7	1.3	

注) 単位はすべて %

けを喚起するストラテジー、肯定的な自己評価を促進するストラテジーの 3 つの領域、35 の主要ストラテジーと各主要ストラテジーに 2～4 の補足ストラテジー 128 から構成される「動機付けストラテジー」をパイロット研究及びアスコ（2015）を基に 30 問に絞り質問用紙を作成した。

動機付けに関する質問に入る前に、性別、学年、英語コミュニケーションレベル、また海外経験の有無及び期間について質問した。

回答方法は、マークシートに五件法で回答してもらった。

研究協力者

研究参加学生は埼玉県私立大学生 413 名千葉県私立大学生 301 名である。学年、英語コミュニケーションレベル、海外経験詳細は表 1 の通りである。

3.3. 倫理的配慮

学生に対しては、研究への協力は自由意志による同意により、回答は無記名でありプライバシーは守られる事を記載し、質問用紙の回答をもって研究への参加に同意した事と判断すると明記した。

回答は無記名であり任意であること、回答を拒否したり中断したり、同意を撤回しても不利益を被ら無い事を明記した。

3.4. データ処理・分析方法手順

回収したマークシートは「カンマくん 2」を用いコンピュータに取り込み、SPSS Ver.22 を使用しまず記述統計、Speaman の相関関係、カイ二乗検定を行った。次に、観測されて変数（質問項目）がどのような共通の特性から影響を受けているのかを明らかにする為に因子分析を行った。

4. 結果

4.1. 英語コミュニケーション、海外経験と英語学習意欲及び小学校英語教育動機づけ

問 5 から問 10 は学生の英語学習動機付け、問 11、13 学生が考える小学校英語教育の重要度を Speaman の相関を用い、学生の英語コミュニケーションレベル、海外経験との相関関係を検証し

表 2

英語コミュニケーションレベル・海外経験との相関分析

	Q5. 英語を勉強することがとても好きだ・楽しい	Q6. 英語を話せる外国人の友達を(沢山)作りたい	Q7. 英語学習は大切だ	Q8. 英語が出来るようになり英語圏の国へ行ってみたい	Q9. 日常生活の中で出来るだけ多く英語を使おうと努力している	Q10. 英語上達の為に最善の努力をしている・努力するつもりだ	Q11. 小学校英語教育は重要	Q13. 小学校教員が英語を指導する為に英語力を高めることは重要
Q3. 英語コミュニケーションレベル	.340***	.177***	.164***	.123***	.131***	.182***	.153***	.152***
Q4. 海外経験(英語圏)	.072	.051	.027	.040	.089*	.048	.035	-.033

*: $p < 0.05$, ***: $p < 0.001$

た結果である。上列の英語コミュニケーションレベルにおいては各質問すべてにおいて正の相関関係が見られる。英語コミュニケーションレベルの高い学生ほど英語学習意欲が高く更に小学校英語教育の重要性も高いと考えていると思われる。

次に表3から表10はコミュニケーションレベルを高群(準2級以上)と低群(3級以下)に分けクロス集計を行い2つのカテゴリー変数が相互に影響を及ぼしているかないか χ^2 検定を用い検証した結果を示している。

表3は問5「英語を勉強する事がとても好きだ、楽しい」という質問に対して英語コミュニケーションレベルと関連性があるかないかを見るため χ^2 検定を行なった所有為であった($\chi^2 = 85.409$, $df=4$, $p<.001$)であるから高群の学生の方が英語を勉強する事がとても好き、楽しいと考えているといえる。以下表4から表10に関しても同様の結果である。

表4は問6「英語を話せる外国人の友達を沢山作りたい」という質問に対して英語コミュニケーションレベルと関連性があるかないかを見るため χ^2 検定を行なった所有為であった($\chi^2 = 22.245$, $df=4$, $p<.001$)であるから高群の学生の方が英語を話せる外国人の友達を沢山作りたい、と考えているという事ができる。

表5は問7「英語学習は大切だ」という質問に対して英語コミュニケーションレベルと関連性があるかないかを見るため χ^2 検定を行なった所有為であった($\chi^2 = 24.165$, $df=4$, $p<.001$)であるから高群の学生の方が英語学習は大切だ、と考えているといえるであろう。

表6は問8「英語ができるようになり英語圏の国へ行ってみたい/住んでみたい」という質問に対して英語コミュニケーションレベルと関連性があるかないかを見るため χ^2 検定を行なった所有為であった($\chi^2 = 15.973$, $df=4$, $p<.01$)であるから高群の学生の方が英語が出来るようになり英語圏の国へ行ってみたい/住んでみたい、と考えているといえる。

表7は問9「日常生活の中で出来るだけ多く英語を使おうと努力している」という質問に対して英語コミュニケーションレベルと関連性があるかないかを見るため χ^2 検定を行なった所有有意差はなかった。($\chi^2 = 9.263$, $df=4$, $p \geq .05$.)

表8は問10「英語上達の為に最善の努力をしているといえる」という質問に対して英語コミュニケーションレベルと関連性があるかないかを見るため χ^2 検定を行なった所有為であった($\chi^2 = 29.689$, $df=4$, $p<.001$)であるから高群の学生の方が英語上達の為に最善の努力をしているといえ

表 3

Q3. 英語コミュニケーションレベル高低 × Q5. 英語を勉強することがとても好きだ・楽しい

			Q5. 英語を勉強することがとても好きだ・楽しい					合計
			全く当ては まらない	余り当ては まらない	どちらでも ない	当てはまる	とても当て はまる	
Q3. 英語コ ミュケー ションレ ベル高低	低群（3級 以下）	度数	67	165	145	75	24	476
		調整済み残差	3.0	5.7	1.1	－6.0	－5.3	
	高群（準2 級以上）	度数	15	33	62	83	40	233
		調整済み残差	－3.0	－5.7	－1.1	6.0	5.3	
合計		度数	82	198	207	158	64	709

$\chi^2(4)=85.409, p<.001$

表 4

Q3. 英語コミュニケーションレベル高低 × Q6. 英語を話せる外国人の友達を（沢山）作りたい

			Q6. 英語を話せる外国人の友達を（沢山）作りたい					合計
			全く当てはまらない	余り当てはまらない	どちらでもない	当てはまる	とても当てはまる	
Q3. 英語コミュニケーションレベル高低	低群（3級以下）	度数	51	103	109	131	85	479
		調整済み残差	1.3	2.0	2.5	－1.1	－3.9	
	高群（準2級以上）	度数	18	36	35	74	72	235
		調整済み残差	－1.3	－2.0	－2.5	1.1	3.9	
合計		度数	69	139	144	205	157	714

$\chi^2(4)=22.245, p<.001$

表 5

Q3. 英語コミュニケーションレベル高低 × Q7. 英語学習は大切だ

			Q7. 英語学習は大切だ					
			全く当ては まらない	余り当ては まらない	どちらでも ない	当てはまる	とても当て はまる	合計
Q3. 英語コ ミュニケー ションレベ ル高低	低群（3級 以下）	度数	32	61	67	200	119	479
		調整済み残差	0.4	2.8	1.9	0.9	－4.4	
	高群（準2 級以上）	度数	14	14	21	90	96	235
		調整済み残差	－0.4	－2.8	－1.9	－0.9	4.4	
合計		度数	46	75	88	290	215	714

$\chi^2(4)=24.165, p<.001$

表 6

Q3. 英語コミュニケーションレベル高低 × Q8. 英語が出来るようになり英語圏の国へ行ってみたい／住んでみたい

			Q8. 英語が出来るようになり英語圏の国へ行行ってみたい／住んでみたい					合計
			全く当てはまらない	余り当てはまらない	どちらでもない	当てはまる	とても当てはまる	
Q3. 英語コミュニケーションレベル高低	低群（3級以下）	度数	70	90	57	146	116	479
		調整済み残差	1.0	2.8	－1.1	0.9	－3.1	
	高群（準2級以上）	度数	28	25	35	64	83	235
		調整済み残差	－1.0	－2.8	1.1	－0.9	3.1	
合計		度数	98	115	92	210	199	714

$\chi^2(4)=15.973, p<.01$

表7

Q3. 英語コミュニケーションレベル高低 × Q9. 日常生活の中でできるだけ多く英語を使おうと努力している

			Q9. 日常生活の中でできるだけ多く英語を使おうと努力している					合計
			全く当てはまらない	余り当てはまらない	どちらでもない	当てはまる	とても当てはまる	
Q3. 英語コミュニケーションレベル高低	低群（3級以下）	度数	112	156	124	60	25	477
		調整済み残差	2.4	.8	－1.9	－0.5	－1.3	
	高群（準2級以上）	度数	37	70	77	33	18	235
		調整済み残差	－2.4	－0.8	1.9	0.5	1.3	
合計		度数	149	226	201	93	43	712

 $\chi^2(4) = 9.263, p \geq .05$

表8

Q3. 英語コミュニケーションレベル高低 × Q10. 英語上達の為に最善の努力をしていると言える・努力するつもりだ

			Q10. 英語上達の為に最善の努力をしていると言える・努力するつもりだ					合計
			全く当てはまらない	余り当てはまらない	どちらでもない	当てはまる	とても当てはまる	
Q3. 英語コミュニケーションレベル高低	低群（3級以下）	度数	91	152	125	93	18	479
		調整済み残差	3.3	2.2	－1.5	－1.5	－3.8	
	高群（準2級以上）	度数	22	56	74	57	26	235
		調整済み残差	－3.3	－2.2	1.5	1.5	3.8	
合計		度数	113	208	199	150	44	714

 $\chi^2(4) = 29.689, p < .001$

表9

Q3. 英語コミュニケーションレベル高低 × Q11. 小学校英語教育は重要

			Q11. 小学校英語教育は重要					合計
			全く当てはまらない	余り当てはまらない	どちらでもない	当てはまる	とても当てはまる	
Q3. 英語コミュニケーションレベル高低	低群（3級以下）	度数	15	54	103	225	82	479
		調整済み残差	－0.8	1.7	2.7	0.8	－4.4	
	高群（準2級以上）	度数	10	17	31	103	74	235
		調整済み残差	0.8	－1.7	－2.7	－0.8	4.4	
合計		度数	25	71	134	328	156	714

 $\chi^2(4) = 24.199, p < .001$

表10

Q3. 英語コミュニケーションレベル高低 × Q13. 小学校教員が英語を指導する為に英語力を高めることは重要

			Q13. 小学校教員が英語を指導する為に英語力を高めることは重要					合計
			全く当てはまらない	余り当てはまらない	どちらでもない	当てはまる	とても当てはまる	
Q3. 英語コミュニケーションレベル高低	低群（3級以下）	度数	37	36	46	191	169	479
		調整済み残差	0.6	2.4	.3	2.2	－3.8	
	高群（準2級以上）	度数	15	7	21	74	118	235
		調整済み残差	－0.6	－2.4	－.3	－2.2	3.8	
合計		度数	52	43	67	265	287	714

 $\chi^2(4) = 17.583, p < .01$

る、と考えているといえる。

表9は問11「小学校英語教育は重要である」という質問に対して英語コミュニケーションレベルと関連性があるかないかを見るため χ^2 検定を行なった所有為であった ($\chi^2 = 24.199$, $df=4$, $p<.001$) であるから高群の学生の方が小学校英語教育は重要である、と考えているといえる。

表10は問13「小学校教員が英語を指導する為に英語力を高める事は重要」という質問に対して英語コミュニケーションレベルと関連性があるかないかを見るため χ^2 検定を行なった所有為であった ($\chi^2 = 17.583$, $df=4$, $p<.01$) であるから高群の学生の方が小学校教員が英語を指導する為に英語力を高める事は重要、と考えているといえる。

4.2. 学習動機付けストラテジー使用

次に参加者が教員になった際、学習者の英語学習動機を高める、維持する為に重要だと考える学習動機付けストラテジー関しての調査結果である。まず基本統計量、コミュニケーションレベルとストラテジー使用に関して関係があるのかどうかピアソンの相関係数、さらにコミュニケーションレベル高低に有意差が生じるのかどうか χ^2 検定及びノンパラメトリック検定を用い検証を行なった。

表11は質14から問40までの学習動機付けストラテジー使用に関して研究参加者全体がどの程度重要視しているかを基本統計量に纏めたものである。

表12は英語コミュニケーションレベルと学習動機付けストラテジー使用間に相関関係があるかどうか検証した。問16、28、34、35、36以外の学習動機付けストラテジー使用と英語コミュニ

表11

Q14-40 基本統計量							
	Q14. 英語学習への熱意、英語がどのよう に自分の生活に役に立 っているか、実例 を挙げて話す	Q15. 教員(ATL含む)と 親しく話が出る 環境を作る	Q16. 家庭と定期的 にやり、家庭 学習の援助を 求める	Q17. 間違いを恐れず に英語を使う事 を勧める	Q18. ユーモアを取り 入れた授業を行う	Q19. グループ活動 を取り入れ、生徒が 上手くとけ込 めるようにす る	Q20. クラス 全体で取り組 む課題を成功 させたり、グ ループ対抗な どの活動を行 う
n	714	713	713	713	714	714	714
中央値	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00
平均値	3.64	4.01	3.34	3.95	4.09	3.99	3.91
標準偏差	1.03	1.10	1.03	1.14	1.14	1.11	1.10

	Q21. 楽しく リラックスし た雰囲気を作 る	Q22. 生徒が 楽しみそう な英語学習 を行い、英 語との出 会いを肯定 的なもの にする	Q23. 上級生 や仲間の 良いお手 本や見せ たり、体 験談を話 してもら ったりす る	Q24. 「英語 をしっかりと 身に付ける 事が将来役 に立つ」と 強調する	Q25. 英語使 用者や英語 文化との触 れ合いを多 くする	Q26. 世界に おける英語 の役割を強 調し生徒自 身にとつ ても彼らの 社会にとつ ても英語習 得が役に立 つ事を話す	Q27. 指導内 容を生徒の 日常体験や 背景に關連 づけたもの にする
n	714	714	714	714	714	714	714
中央値	5.00	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	4.00
平均値	4.20	4.05	3.62	3.37	3.90	3.45	3.81
標準偏差	1.12	1.09	1.01	1.07	1.06	1.01	1.06

	Q28. 目に見える完成品を作り出す活動を行う	Q29. 英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う	Q30. 学習教材を学習者に関連深いものを使用する	Q31. 授業が単調にならないように変化のある授業を行う	Q32. 現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題を行う	Q33. 「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる	Q34. 難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う
n	714	714	713	714	714	714	714
中央値	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
平均値	3.37	3.63	3.82	3.98	3.56	4.08	3.93
標準偏差	1.02	1.05	1.04	1.11	1.05	1.12	1.06

	Q35. 学習者が「できないこと」ではなく、「できること」に焦点を当てたテストを行う	Q36. 生徒の長所と能力に向け、優れた役割が与えられる活動を行う	Q37. 生徒の比較は避け、競争ではなく協調を促進する	Q38. 努力点も評価に含める	Q39. 透明な評価方法をおこなう	Q40. 進歩に対して報酬を与える
n	712	714	714	714	714	713
中央値	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00
平均値	3.68	3.72	3.84	3.98	3.72	3.33
標準偏差	1.09	1.02	1.07	1.15	1.08	1.07

表12

Q3とQ14-Q40の相関分析

	Q14. 英語学習への熱意、英語がどのように自分の生活に役に立っているか、実例を挙げて話す	Q15. 教員(ATL含む)と親しく話が出る環境を作る	Q16. 家庭と連絡を定期的に取り、家庭学習の援助を求める	Q17. 間違えを恐れずに英語を使う事を勧める	Q18. ユーモアを取り入れた授業を行う	Q19. グループ活動を取り入れ、生徒が上手くどけ込めるようにする	Q20. クラス全体で取り組む課題を成功させたり、グループ対抗などの活動を行う
Q3. 英語コミュニケーションレベル	.084*	.115**	.061	.173***	.166***	.125***	.119**

	Q21. 楽しくリラックスした雰囲気を作る	Q22. 生徒が楽しめそうな英語学習を行い、英語との出会いを肯定的なものにする	Q23. 上級生や仲間の良いお手本や見せたり、体験談を話してもらったりする	Q24. 「英語をしっかりと身につける事が将来役に立つ」と強調する	Q25. 英語使用者や英語文化との触れ合いを多くする	Q26. 世界における英語の役割を強調し生徒自身にとっても彼らの社会にとっても英語習得が役に立つ事を話す	Q27. 指導内容を生徒の日常体験や背景に関連づけたものにする
Q3. 英語コミュニケーションレベル	.103**	.133***	.085*	.085*	.140***	.079*	.122**

	Q28. 目に見える完成品を作り出す活動を行う	Q29. 英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う	Q30. 学習教材を学習者に関連深いものを使用する	Q31. 授業が単調にならないように変化のある授業を行う	Q32. 現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題を行う	Q33. 「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる	Q34. 難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う
Q3. 英語コミュニケーションレベル	.014	.081*	.096*	.159***	.127***	.134***	.051

	Q35. 学習者が「できないこと」ではなく、「できること」に焦点を当てたテストを行う	Q36. 生徒の長所と能力に向け、優れた役割が与えられる活動を行う	Q37. 生徒の比較は避け、競争ではなく協調を促進する	Q38. 努力点も評価に含める	Q39. 透明な評価方法をおこなう	Q40. 進歩に対して報酬を与える
Q3. 英語コミュニケーションレベル	.043	.070	.085*	.098**	.109**	.041

ケーションレベルとは強いとは言いが相関関係があるといえよう。

表13は英語コミュニケーションレベル高低と学習動機付けストラテジー使用の基本統計量を示した。

表14Mann-WhitneyのU検定を実施し目的変数（問14～40）について問3のコミュニケーションレベル高低の間に有意差があるかどうか検定した。問16、17、18、24、26、33の動機付けストラテジーの重要度はコミュニケーションレベル高低で有意差があると示唆されている。

4.3. 学習動機付けストラテジー因子分析

各項目の回答に過度の偏りがないか検討し問14から問40まで27項目を用い、学生をコミュニケーションレベル高低で2グループに分け、それぞれのグループ毎の学習動機付けストラテジー重要度に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した。

表15、コミュニケーションレベル低群は固有値1を基準として2つの因子を抽出した。第一因子から14.178、1.472である。

その結果、第一因子は「リラックスした雰囲気」「ユーモア」など楽しい雰囲気の学習環境が学習動機付けを促すという内容の項目群といえよう。そこでこの因子を「楽しい肯定的な学習」と名付ける。

12 第二因子は「完成品をつくる」「目に見える進歩」「知的好奇心」などの内容の項目群から構成されているので、「完成品、刺激のある学習」と命名する。

表16はコミュニケーションレベル高群の因子分析結果である。固有値1を基準として低群同様に2つの因子を抽出した。第一因子から9.904、2.255である。

その結果、第一因子は低群同様「リラックスした雰囲気」「ユーモア」など楽しい雰囲気の学習環境に関する内容項目から構成されているので「肯定・快楽」因子と名付ける。

表13

Q14-40 基本統計量（英語コミュニケーションレベル高低別）

		Q14. 英語学習への熱意、英語がどのように自分の生活に役に立っているか、実例を挙げて話す	Q15. 教員（ATL含む）と親しく話が出来、環境を作る	Q16. 家庭と連絡を定期的に取り、家庭学習の援助を求める	Q17. 間違えを恐れずに英語を使う事を勧める	Q18. ユーモアを取り入れた授業を行う	Q19. グループ活動を取り入れ、生徒が上手くとけ込めるようにする	Q20. クラス全体で取り組む課題を成功させたり、グループ対抗などの活動を行う
低群 (3級以下)	n	479	478	478	479	479	479	479
	中央値	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00
	平均値	3.58	3.93	3.28	3.84	3.97	3.92	3.84
	標準偏差	1.01	1.13	1.00	1.16	1.18	1.12	1.12
高群 (準2級以上)	n	235	235	235	234	235	235	235
	中央値	4.00	4.00	4.00	4.50	5.00	4.00	4.00
	平均値	3.76	4.17	3.45	4.19	4.33	4.13	4.06
	標準偏差	1.06	1.02	1.09	1.08	1.04	1.09	1.06
		Q21. 楽しくリラックスした雰囲気を作ろう	Q22. 生徒が楽しみそうない、英語との出会いを肯定的なものにする	Q23. 上級生や仲間の良いお手本や見せたり、体験談を話してもらったりする	Q24. 「英語をしっかりと身につける事が将来役に立つ」と強調する	Q25. 英語使用者や英語文化との触れ合いを多くする	Q26. 世界における英語の役割を強調し生徒自身にとっても彼らの社会にとっても英語習得が役に立つ事を話す	Q27. 指導内容を生徒の日常体験や背景に関連づけたものにする
低群 (3級以下)	n	479	479	479	479	479	479	479
	中央値	4.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	4.00
	平均値	4.12	3.97	3.58	3.30	3.82	3.40	3.72
	標準偏差	1.16	1.10	0.96	1.04	1.05	0.98	1.05
高群 (準2級以上)	n	235	235	235	235	235	235	235
	中央値	5.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
	平均値	4.36	4.20	3.71	3.50	4.05	3.56	3.98
	標準偏差	1.02	1.06	1.11	1.12	1.05	1.06	1.06
		Q28. 目に見える完成品を作り出す活動を行う	Q29. 英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う	Q30. 学習教材を学習者に関連深いものを使用する	Q31. 授業が単調にならないように変化のある授業を行う	Q32. 現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的な好奇心を刺激する課題を行う	Q33. 「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる	Q34. 難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う
低群 (3級以下)	n	479	479	479	479	479	479	479
	中央値	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
	平均値	3.35	3.58	3.77	3.89	3.48	3.99	3.89
	標準偏差	1.00	1.02	1.02	1.11	1.02	1.15	1.08
高群 (準2級以上)	n	235	235	234	235	235	235	235
	中央値	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	4.00
	平均値	3.42	3.72	3.91	4.17	3.72	4.27	4.02
	標準偏差	1.08	1.10	1.07	1.07	1.10	1.05	1.01

		Q35. 学習者が「できないこと」ではなく、「できること」に焦点を当てたテストを行う	Q36. 生徒の長所と能力に向け、優れた役割が与えられる活動を行う	Q37. 生徒の比較は避け、競争ではなく協調を促進する	Q38. 努力点も評価に含める	Q39. 透明な評価方法をおこなう	Q40. 進歩に対して報酬を与える
低群 (3級以下)	n	478	479	479	479	479	478
	中央値	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00
	平均値	3.64	3.67	3.78	3.90	3.64	3.30
	標準偏差	1.10	1.01	1.09	1.18	1.06	1.06
高群 (準2級以上)	n	234	235	235	235	235	235
	中央値	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00
	平均値	3.76	3.82	3.97	4.13	3.89	3.38
	標準偏差	1.07	1.04	1.01	1.07	1.09	1.10

表14

英語コミュニケーションレベルの高低×Q14～Q40

	Q14. 英語学習への熱意、英語がどのように自分の生活に役に立っているか、実例を挙げて話す	Q15. 教員(ATL含む)と親しく話が出る環境を作る	Q16. 家庭と連絡を定期的に取り、家庭学習の援助を求める	Q17. 間違えを恐れずに英語を使う事を勧める	Q18. ユーモアを取り入れた授業を行う	Q19. グループ活動を取り入れ、生徒が上手くとりかめるようにする	Q20. クラス全体で取り組む課題を成功させたり、グループ対抗などの活動を行う
Mann-WhitneyのU	50271.000	48957.500	51082.500	44867.500	45010.000	49045.500	49276.000
Z	-2.450	-2.981	-2.048	-4.600	-4.693	-2.990	-2.866
有意確率	.014	.003	.041	.000	.000	.003	.004
中央値(低群)	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00
中央値(高群)	4.00	4.00	4.00	4.50	5.00	4.00	4.00

	Q21. 楽しくリラックスした雰囲気を作	Q22. 生徒が楽しみそうない、英語との出会いを肯定的なものにする	Q23. 上級生や仲間の良いお手本や見せたり、体験談を話してもらったりする	Q24. 「英語をしっかりと身につける事が将来役に立つ」と強調する	Q25. 英語使用者や英語文化との触れ合いを多くする	Q26. 世界における英語の役割を強調し生徒自身にとっても彼らの社会にとっても英語習得が役に立つ事を話す	Q27. 指導内容を生徒の日常体験や背景に関連づけたものにする
Mann-WhitneyのU	49010.500	48515.500	50744.000	50194.500	48332.500	50651.500	47433.000
Z	-3.094	-3.219	-2.241	-2.445	-3.273	-2.277	-3.628
有意確率	.002	.001	.025	.015	.001	.023	.000
中央値(低群)	4.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	4.00
中央値(高群)	5.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00

	Q28. 目に見える完成品を作り出す活動を行う	Q29. 英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う	Q30. 学習教材を学習者に関連深いものを使用する	Q31. 授業が単調にならないように変化のある授業を行う	Q32. 現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題を行う	Q33. 「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる	Q34. 難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う
Mann-WhitneyのU	53870.000	51002.000	50669.500	46607.000	47783.500	47708.000	52900.500
Z	-.973	-2.155	-2.212	-3.990	-3.429	-3.559	-1.381
有意確率	.331	.031	.027	.000	.001	.000	.167
中央値(低群)	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
中央値(高群)	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	4.00

	Q35. 学習者が「できないこと」ではなく、「できること」に焦点を当てたテストを行う	Q36. 生徒の長所と能力に向け、優れた役割が与えられる活動を行う	Q37. 生徒の比較は避け、競争ではなく、協調を促進する	Q38. 努力点も評価に含める	Q39. 透明な評価方法をおこなう	Q40. 進歩に対して報酬を与える
Mann-WhitneyのU	52439.500	50991.500	51123.000	50094.500	47881.000	53715.500
Z	-1.408	-2.167	-2.102	-2.539	-3.384	-.988
有意確率	.159	.030	.036	.011	.001	.323
中央値(低群)	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00
中央値(高群)	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00

Mann-WhitneyのU検定

第二因子は「将来役に立つ」「進歩が目に見える」など実用的な内容の項目群から構成されているので「実用」因子と名付ける。

次に既に質問が3つに分類されている「学習環境」「学習開始時」「学習動機を維持し保護する」の因子分析をおこなった。

まず、学習環境の各項目の回答に過度の偏りがないかどうか検討して問5から10まで用い因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施した。

コミュニケーションレベル低群は固有値4.818の一因子のみ抽出できた。「ユーモア」「リラックス」等のキーワードを元に「快樂学習」因子と命名する。

コミュニケーションレベル高群結果は、因子抽出には固有値1以上が基本的条件だが、1を少し下回る一因子を含め2因子とした。第一因子から、4.818、.995である。

第一因子は低群同様「ユーモア」「楽しく」に関連した項目の内容と言えるので、この因子を低群同様「快樂学習」と命名する。

第二因子は「役に立つ」「家庭との連携」の項目で構成されるので「熱意」と命名する。

次の「学習開始時」の動機付けストラテジー重要度に関する因子分析の結果、コミュニケーションレベル低群は固有値1を少し下回る因子を含め2因子抽出できた。第一因子から3.744、.921である。第一因子は「楽しめそうな学習」「英語文化との触れあい」等を含む肯定的体験に関連した項目群なので「肯定的体験学習」と命名する。第二因子は「英語の役割」「将来役に立つ」等を含

15

表15

低群

Q14－40の因子分析

double loading（1項目が二つ以上の因子に0.32以上の負荷をもつ）のQ23、24、26、36を削除

Q14－40の因子分析結果（Q5－10合計低群）

項目	因子	
	肯定	刺激
楽しくリラックスした雰囲気のクラスを作る	1.024	－.151
生徒が楽しそうな英語学習を行い、英語との出会いを肯定的なものにする	.911	－.022
授業が単調にならないように変化のある授業を行う	.910	－.023
教員（ALT含む）と親しく話が出来る環境を作る	.904	－.054
グループ活動を取り入れ、生徒が上手くとけ込めるようにする	.899	－.046
「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる	.889	.008
ユーモアを取り入れた授業を行う	.885	－.042
努力点も評価に含める	.874	－.049
間違えを恐れずに英語を使う事を勧める	.866	－.038
クラス全体で取り組む課題を成功させたり、グループ対抗などの活動を行う	.828	.012
英語使用者や英語文化との触れあいを多くする	.765	.089
難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う	.754	.070
生徒の比較は避け、競争ではなく協調を促進する	.723	.035
指導内容を生徒の日常体験や背景に関連づけたものにする	.686	.208
英語学習への熱意、英語がどのように自分の生活に役に立っているか、実例を挙げて話す	.641	.082
透明な評価方法をおこなう	.615	.188
学習教材を学習者に関連深いものを使用する	.602	.308
学習者が「できないこと」ではなく、「できること」に焦点を当てたテストを行う	.572	.208
目に見える完成品を作り出す活動を行う	－.102	.807
英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う	.242	.649
進歩に対して報酬を与える	－.126	.592
現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題を行う	.199	.555
家庭との連絡を定期的に取り、家庭学習の援助を求める	.011	.536
因子間相関		
肯定	1.000	.705
刺激	.705	1.000

主因子法、プロマックス回転

む項目群なので「実用的な学習」と命名する。

コミュニケーションレベル高群も低群同様に2因子抽出できた。第一因子から3.361、1.018である。因子を構成する質問項目群は低群と同様である。

16

最後に「学習動機を維持し保護する」に関する動機付けストラテジー重要度に関する因子分析の結果、コミュニケーションレベル低群は固有値1を少し下回る因子含め2因子抽出できた。第一因子から6.841、.991である。第一因子は「変化のある学習」「出来た・わかった」「出来る事を行う」など学習者の能力にあった学習指導を行うなどの項目群なので「能力に見合った学習」と命名する。第二因子は「現在の能力より高い刺激的な学習」「進歩が見える学習」など学習に刺激を与える項目群なので「刺激のある学習」と命名する。

表16

高群

Q14－40の因子分析

double loading（1項目が二つ以上の因子に0.32以上の負荷をもつ）のQ27、30、26、35-37を削除

Q14－40の因子分析結果（Q5－10合計高群）

項目	因子	
	快楽	実用
楽しくリラックスした雰囲気のカラスを作る	.961	-.162
ユーモアを取り入れた授業を行う	.939	-.123
教員（ALT含む）と親しく話が出来る環境を作る	.892	-.130
生徒が楽しみそうな英語学習を行い、英語との出会いを肯定的なものにする	.802	.012
「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる	.773	.024
グループ活動を取り入れ、生徒が上手くとけ込めるようにする	.763	.048
努力点も評価に含める	.763	-.035
授業が単調にならないように変化のある授業を行う	.739	.069
間違えを恐れずに英語を使う事を勧める	.733	.037
クラス全体で取り組む課題を成功させたり、グループ対抗などの活動を行う	.598	.134
難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う	.598	.162
英語使用者や英語文化との触れあいを多くする	.565	.271
透明な評価方法をおこなう	.405	.292
「英語をしっかりと身につける事が将来役に立つ」と強調する	-.101	.800
世界における英語の役割を強調し生徒自身にとっても彼らの社会にとっても英語習得が役に立つ事を話す	-.055	.793
目に見える完成品を作り出す活動を行う	-.017	.661
現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題を行う	.095	.629
英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う	.152	.594
上級生や仲間の良いお手本や見せたり、体験談を話してもらったりする	.167	.579
進歩に対して報酬を与える	-.121	.572
家庭との連絡を定期的に取り、家庭学習の援助を求める	.036	.452
因子間相関		
快楽	1.000	.603
実用	.603	1.000

主因子法、プロマックス回転

コミュニケーションレベル高群も固有値1を基準として2因子抽出できた。第一因子から5.014、1.096である。第一因子、「努力も評価に含める」「出来た・分かった」等を含む構成項目群なので「努力重視学習」と命名する。

第二因子は低群同様「現在の能力より高い刺激的な学習」「進歩が見える学習」など学習に刺激を与える項目群なので「刺激のある学習」と命名する。

17

5. 考察

5.1. 研究参加者の英語コミュニケーション力

本研究で用いたアンケート問3コミュニケーションレベルは英検取得級で換算した英語コミュニケーションレベルを示し中央値が英検3級である。

文部科学省2016年度公立学校教員採用選考試験実施方法調査によると実践的な高い英語力を有

表17

Q14－21の因子分析結果（Q5－10合計高群）

項目	因子	
	快楽	熱意
ユーモアを取り入れた授業を行う	.950	-.107
楽しくリラックスした雰囲気のクラスを作る	.903	-.045
グループ活動を取り入れ、生徒が上手くとけ込めるようにする	.812	-.025
クラス全体で取り組む課題を成功させたり、グループ対抗などの活動を行う	.688	.029
教員（ALT含む）と親しく話が出来る環境を作る	.631	.253
間違えを恐れずに英語を使う事を勧める	.624	.209
英語学習への熱意、英語がどのように自分の生活に役に立っているか、実例を挙げて話す	-.023	.836
家庭との連絡を定期的に取り、家庭学習の援助を求める	-.006	.443
因子間相関		
快楽	1.000	.660
熱意	.660	1.000

主因子法、プロマックス回転

表18

Q22－28の因子分析結果（Q5－10合計低群）

項目	因子	
	肯定的体験	実用
生徒が楽しみそうな英語学習を行い、英語との出会いを肯定的なものにする	.991	-.114
指導内容を生徒の日常体験や背景に関連づけたものにする	.810	.099
英語使用者や英語文化との触れあいを多くする	.706	.148
世界における英語の役割を強調し生徒自身にとっても彼らの社会にとっても英語習得が役に立つ事を話す	.040	.885
「英語をしっかり身につける事が将来役に立つ」と強調する	-.061	.857
目に見える完成品を作り出す活動を行う	.210	.437
因子間相関		
肯定的体験	1.000	.630
実用	.630	1.000

主因子法、プロマックス回転

Q22－28の因子分析結果（Q5－10合計高群）

項目	因子	
	肯定的体験	実用
生徒が楽しみそうな英語学習を行い、英語との出会いを肯定的なものにする	.810	-.100
指導内容を生徒の日常体験や背景に関連づけたものにする	.786	.072
英語使用者や英語文化との触れあいを多くする	.762	.099
世界における英語の役割を強調し生徒自身にとっても彼らの社会にとっても英語習得が役に立つ事を話す	.030	.827
「英語をしっかり身につける事が将来役に立つ」と強調する	-.037	.806
目に見える完成品を作り出す活動を行う	.029	.551
因子間相関		
肯定的体験	1.000	.639
実用	.639	1.000

主因子法、プロマックス回転

表19

低群 Q36 (double loading) 削除 Q29 ーの因子分析結果 (Q5 ー 10 合計低群)		
項目	因子	
	能力重視	刺激
授業が単調にならないように変化のある授業を行う	.919	-.040
「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる	.918	-.026
難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う	.908	-.087
努力点も評価に含める	.891	-.058
生徒の比較は避け、競争ではなく協調を促進する	.764	.001
学習者が「できないこと」ではなく、「できること」に焦点を当てたテストを行う	.661	.118
透明な評価方法をおこなう	.624	.203
学習教材を学習者に関連深いものを使用する	.616	.259
現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題を行う	.068	.701
進歩に対して報酬を与える	-.137	.626
英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う	.296	.549
因子間相関		
能力重視	1.000	.747
刺激	.747	1.000
主因子法、プロマックス回転		

高群 Q30、36 (double loading) 削除 Q29 ーの因子分析結果 (Q5 ー 10 合計高群)		
項目	因子	
	努力重視	刺激
努力点も評価に含める	.906	-.155
「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる	.835	-.057
授業が単調にならないように変化のある授業を行う	.772	-.024
難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う	.702	.061
生徒の比較は避け、競争ではなく協調を促進する	.636	.127
透明な評価方法をおこなう	.476	.241
学習者が「できないこと」ではなく、「できること」に焦点を当てたテストを行う	.466	.261
現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題を行う	.057	.662
進歩に対して報酬を与える	-.135	.646
英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う	.137	.572
因子間相関		
努力重視	1.000	.682
刺激	.682	1.000
主因子法、プロマックス回転		

する学生を採用する教員採用試験を実施する教育委員会が増えている事が判明している。小学校教員採用試験に52教育委員会（68教育委員会に調査実施）が「外国語活動」に関する内容を筆記試験に加えている。実技試験に関しては23教育委員会が「外国語活動」の内容でリスニング、スピーキングなど英語で面接を実施し英語コミュニケーション能力を評価の対象にしている。文部科学省が提唱する英語コアカリキュラムの実施の方向から今後もこの傾向を現在実技試験に外国語活動を含んでいない教育委員会でも取り込む事が予測できる。

この結果から本研究の小学校教員養成コースを履修している研究参加者は、英語力が十分ではなく、外国語活動及び2020年度から実施される教科に対応できる英語コミュニケーションレベルまで習得させる事は大学において重要課題だと考えられる。

5.2. 英語コミュニケーションレベル・海外経験と英語動機付け

問5から10は「英語を勉強することが好きだ」「英語を話せる外国人の友達を沢山作りたい」「英語学習は大切だ」「英語が出来るようになり英語圏の国に行ってみたい・住んでみたい」「日常生活の中で出来るだけ多く英語を使おうと努力している」「英語上達の為に最善の努力をしていると言える」は学生の英語学習動機付け（学習意欲）に関する質問である。当然の結果と考えられるが、英語コミュニケーションレベルの高い学生ほど英語動機づけが高いと相関関係が見いだせた。アンケートの動機付けに関する質問は内発的学習意欲（Deci and Ryan, 1985）である。内発的動機付けは、行動を起こす際に、喜びを感じるとか自分の興味、好奇心を満足させるように、自己自らその行為の為に行動を起こすことを言う。内発的学習意欲が高い学習者は、英語学習そのものを楽しみ、授業の課題が無くても自発的に英語学習に取り組む学習者だと考えられる。また、単に良い成績を取る、TOEICで高得点を目標にする為だけや、仕事に有利だから英語学習をしている訳ではないと言える。英語習得には長い年月が掛かり日々の努力が必要とされている。外発的学習動機付けは、外的な報酬の為に英語学習をしている場合、目標が達成されたならば、英語学習に興味を失う可能性も高いので、英語習得には内発的に動機付けする必要があるとも考えられている。

学生の海外経験の中央値は「無し」である。93.3パーセントの学生が海外に行ったことがないかもしくは1ヶ月以下の所謂語学留学、もしくは旅行で英語圏の国に行った経験を持っている。今回の結果、海外経験と英語学習動機付けの相関関係は問9の「日常生活の中で出来るだけ英語を使おうと努力している」が弱い正の相関があるのみで、他の問との相関関係は見いだせなかった。海外経験があることで実践的な英語力も高まり英語でコミュニケーションをしてみようという意欲も自信も高まるので、日常生活の中で英語を使う機会を積極的に探して英語を使う努力をしていると言える。

問11、13は「小学校英語教育は重要である」「小学校教員が英語を指導する為に英語力を高める事は重要である」と小学校英語教育の重要度に対する質問である。上記、英語学習動機付けと同様に英語コミュニケーションレベルと重要度は相関関係を示している。英語力が高い学生は、英語力を高める為に努力を通して英語習得には時間が掛かる事を理解し早期英語学習の大切さを認識しているのであろう。更に、より良い英語教育を行う為に小学校教員が英語力を高める必要性を感じていると考えられる。

5.3. 学習動機付けストラテジー検討

英語コミュニケーションレベルと英語学習動機付けの強度の関係を考察してきたが、次に学生が教員になった際、どの様な学習動機付けストラテジーを用い学習者の英語学習の意欲を高め興味付けを行うと考えているのかを、結果を元に考察する。

20

5.3.1. 低群・高群ストラテジー全体比較

まず最初に学生全体を英語コミュニケーションレベル低群、高群で分けたデータを用い因子分析を実施した。

低群の結果は、第一因子は「肯定的な学習」で「リラックスした雰囲気のクラスを作る」「ユーモアを取り入れた授業を行う」「生徒が楽しそうな英語学習を行い、英語との出会いを肯定的なものにする」「教員と楽しく話ができる」など18のストラテジーから構成され、学習環境、教員

関係、課題難易度、学習教材、評価方法等学習に関わる。リラックスした雰囲気の中で担当教員とも気軽に話ができる、学友とはライバルではなく和気あいあいと共に勉学に励める。また、学習内容に関しても、難しくチャレンジをする課題ではなく、現在の自分の能力でも十分良い成績が取れる授業が好ましい。学習結果を計る際も、点数評価だけではなく努力点も加味される。このような授業環境が学習意欲が上がると考えるのであろう。

言語不安が学習意欲を下げる要因の一つになっている (MacIntyre, 1999) ので、言語不安を少しでも軽減できるクラス環境を作る事は学習意欲向上に大切である。特に英語コミュニケーションクラスにおいて、間違えを指摘され、訂正される事は不安の大きな要因となるであろう。同様に評価される事は不安の原因にもなっていると考えられる。教師側の一方的な評価だけではなく、学生の自己評価「努力点も評価に含める」は言語不安を軽減する戦略になりうるであろう。

第二因子を見ると「目に見える完成品を作り出す活動を行う」「英語力の進歩が目に見えるような様々な催し物を行う」「進歩に対して報酬を与える」等から構成される目に見える達成感、学習動機強化に関わる肯定的な刺激に関わる戦略である。低群の学生は英語動機付けも比較的低いので外発的動機づけの一つである報酬、刺激が因子の一つになっていると考えられる。

外発的動機付けは、外的な報酬を獲得する、もしくは罰を回避する為になど、目標への手段としてある行為を行う事と関連する動機付けである。学生の場合、履修している英語科目において良い成績を取る事、TOEICで高得点、もしくはその職種で最低必用な得点を取る事を目的として英語学習に励むなど、ある目的を達成する為の手段、道具として目標達成まで英語学習に取り組む意欲のことである。このある目標達成の為、または利益の為に動機付けされて行動を取る場合、設定した目標が達成された場合、例えば就職の為にTOEIC730点が必要で取得できた、もしくは報酬がもらえないと英語学習意欲が下がる事が考えられる。

高群の因子分析を見ると低群同様2因子から構成されており、第一因子は低群同様「リラックスした雰囲気を作りだす」「楽しい学習」等から構成されている。

低群との違いは「授業が単調にならないように変化をつける」である。

リラックスでき、自分の能力にあった不安が軽減されるクラス環境であっても、段々教師も学生も楽しさより変化のない単調さの方が目につくのであろう。そこで、好奇心を刺激する課題、現在の力より少し難しい課題や日々の努力の成果が形に見える事が学習意欲を維持する為に必要だと高群の学生は考えているのであろう。また、当然のことながら外発的動機付けは、外的な報酬（英検合格、TOEIC高得点など）を獲得する、もしくは罰を回避する為になど、目標への手段としてある行為を行う事と関連する動機付けである。学生の場合、履修している英語科目において良い成績を取る事、TOEICで高得点、もしくはその職種で最低必用な得点を取る事を目的として英語学習に励むなど、ある目的を達成する為の手段、道具として目標達成まで英語学習に取り組む意欲のことである。このある目標達成の為、または利益の為に動機付けされて行動を取る場合、設定した目標が達成された場合、例えば就職の為にTOEIC730点が必要で取得できた、英語学習意欲が下がる事が考えられる。

21

授業の単調さに変化をもたらすためには、授業をより楽しいものにする事も重要な方策である。

5.3.2. 「学習環境」戦略比較

次に戦略を「学習環境」「学習開始時」「学習動機を維持し保護する」を3つのカテゴリ

ーに分類し低群、高群を変数にした結果を考察する。

低群は「ユーモアのある授業」「リラックスできる環境」など楽しい雰囲気の学習環境を作る内容関連のストラテジーのみ有効と考えているようである。

一方、高群は低群同様第一因子は「ユーモア」「リラックスした雰囲気」という内容関連のストラテジーで構成されて楽しい英語学習環境作りが重要と考えている。しかし、第二因子は「教員が英語学習への熱意、英語がどのように役に立つのか実例を挙げて話す」「家庭戸連絡を取り家庭学習の援助を求める」の2つストラテジーから構成される第二因子が抽出されたのは、低群と異なるところである。経験豊富な教師ならば、教師が学習者に多大な影響を与える可能性がある事は認識している。英語学習に関して言えば、教員の英語学習成功経験を学生と共有する事は、学生に効果的な学習方法を指導することにもなり、また教員が担当している教科に対していかに情熱を傾けているか示すことにもなる。英語学習を真剣に取り組み英語力を高めた学生は教員の影響力の高さの認識もあるのであろう。

また、小学校における英語学習時間だけでは十分ではない事を高群の学生は理解して、家庭に置いて少しでも英語学習環境を作ってもらえるよう、家族を巻き込んだ英語学習の効用も考えているのであろう。

5.3.3. 「学習開始時」ストラテジー考察

学習開始時における動機付けストラテジーは低群、高群とも2因子抽出され因子名も「肯定的体験」「実用」構成ストラテジーも同じものである。

第一因子肯定的体験の中に「英語使用者や英語文化との触れあいを多くする」、第二因子「世界における英語の役割を強調し役に立つことを話す」また「英語をしっかりと身につける事が将来役に立つ」を含む内容のストラテジーで構成されている。

日本で英語が回りにあるとは言え、やはりまだ英語を使う人が周辺にいなかったり、家庭に英語がなかったりする学習者も多い。そのような中、学校でなぜ英語を勉強しなくてはいけないのか理解できない学習者も少なくない。重要性、目的を理解出来ないまま幾ら楽しい雰囲気を作り出しても外国語開始時には十分な動機付けにはならない。学習を開始するにあたり「英語」がどのように役に立つのか使えるのかをイメージを構築させ理解させる事は重要になってくる。

5.3.4. 「学習動機を維持し保護する」ストラテジー考察

適切なクラス環境があり、学習意欲が高まり、教員からの励ましもあり、学習が順調に行われていても、ある程度時間の経過により学習意欲を維持する事は難しくなる。英語学習は長丁場であるから学習動機を維持し保護するストラテジーも重要である。

低群の第一因子名を「能力重視」高群を「努力重視」と因子名を異なるものにしたが、構成ストラテジーは両群とも「できた、わかった等成功体験をさせる」「できない事ではなく、出来ることに焦点をあてたテストをおこなう」「比較はさけ、競争ではなく協調を促進する」等自己効力を高めるストラテジー項目から構成されている。

「自己効力感理論」Bandura (1997) (Self-efficacy theory) によると、認知された自己の能力を動機づけの要因とし、行動するしないを決定するという。この自己効力感を高める方法の一つに「成功体験」自分自身の努力で成功した、達成したという経験が有効だと考えられる。よって授業で「できた、わかった」が体験できるのは自己効力感が引き上げられ、学習動機維持に繋がるのだらう。

両群の第二因子名は刺激である。他の教科の「お勉強」と言うより楽しい環境で和気藹々と英語という新しい言語に触れ、初めは誰でもワクワク取り組むであろう。しかし、時間が経つにつれ、徐々に興味が薄れがちである。そこで「できた、わかった」で自信を持たせ更に「現在の英語力より少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題」を行うストラテジーを用いることにより学習意欲を維持させもしくは回復させると考えられる。

おわりに

本研究では埼玉、千葉2校の小学校教員免許履修学生を対象に英語コミュニケーションレベルを2群（低群、高群）を変数にし、英語学習動機付け強度、小学校英語教育への熱意、及び学生が考える小学校英語教育現場における教員が用いる動機付けストラテジーを考察してきた。

学生の英語力に関しては、2校の学生全般として、教員になった際、担任としてALTと英語を指導するには十分な英語力を習得していない。コアプログラムの導入を待たずに教養プログラムのみならず学生の英語力を高める英語プログラムを導入する事は急務であろう。

学生の英語動機付けに関しては、恐らく学生自身が小学校から英語教育を受けてきて英語コミュニケーション能力及び英語全般能力を高める事が何らかの理由で出来なかったので自己効力を高める事が必要であろう。例えば、海外研修に参加させ事前研究で徹底的に使える英語を練習し、現地で「できる・わかる」の成功体験を学生に積ませるなども必要であろう。

ストラテジーに関しては学生の少ない経験に基づき、もしくは教員から習った勉強の仕方を受けついでいるようである。小学校教員養成コアカリキュラム（試案）にある「子供の第二言語習得についての知識・理解：子どもの学び方の特徴、言葉の学ばれ方の特徴」を免許課程に盛り込む事により、経験のみからの指導方法から脱却でき、効果が上がる英語学習をALTと行える担任になることができるであろう。

今後の課題

本研究の協力大学が埼玉、千葉の私立大学2校と非常に少なかった為に学生の英語力、動機付けに偏りがあったと考えられるので、次の研究では複数大学の学生に協力を仰ぎ偏りのない参加学生で研究を行うこととする。

謝辞

本研究は淑徳大学平成27年度学術研究助成金を用い実施した。本研究に快く参加して下さった教員の方々、また学生たち皆様に心より感謝の意を表する。

参考文献

- Atkinson, J. W. and J. O. Raynor (Eds.) (1974). *Motivation and Achievement*. Washington, DC: Winston Press.
- Bundura, A. (1997). *Self-Efficacy: The Exercise of Control*. New York: Freeman.
- Brophy J. E. (1987). Synthesis of research on strategies for motivation students to learn. *Educational Leadership*, 45, 40-48
- Brown, P. & S, C, Levinson. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge:

- Cambridge University Press
- Covington, M. V. (1998). *The Will to Learn: A Guide for Motivating Young People*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Csikszentmihalyi, M. (1997). Intrinsic motivation and effective teaching: A flow analysis. In J. L. Bess (Eds.) *Teaching Well and Linking It: Motivating Faculty to Teach Effectively*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 72-89.
- Deci, E. L. and R. M. Ryan. (1985). *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*. New York: Plenum.
- Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *Modern Language Journal*, 78, 273-284.
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ドルニェイ、Z. (2005). 動機づけを高める英語指導ストラテジー 35 大修館
- Eccles, J. S. and A. Wigfield. (1995). In the mind of the actor: The structure of adolescents' achievement task values and expectancy-related beliefs. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 215-225.
- Gardner, R. C. (1979). Social psychological aspects of second language acquisition. In H. Giles and R. St. Clair (Eds.) *Language and Social Psychology*. Oxford: Blackwell, 193-220.
- Gardner, R. C. and W. E. Lambert. (1972). *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, MA: Newbury House.
- Goodman, P. S. & Friedman, A. (1968). An examination of the effect of wage inequity in the hourly condition. *Organizational & Behavior* 3, 340-352.
- Harter, S. (1981). A new self-report scale of intrinsic versus extrinsic orientation in the classroom: Motivational and informational components. *Developmental Psychology*, 17, 300-312.
- Locke, E. A. and G. P. Latham. (1990). *A Theory of Goal Setting and Task Performance*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Maslow, A. H. (1970). *Motivation and Personality* (2nd ed.). New York: Harper and Row.
- Raffini, J. P. (1993). *Winners without Losers: Structures and Strategies for Increasing Student Motivation to Learn*. Needham Heights, MA: Allyn and Bacon.
- 上淵寿 (2007) 動機づけ研究の最前線 北大路書房
- Weiner, B. (1992). *Human Motivation: Metaphors, Theories and Research*. Newbury Park, CA: Sage.
- 文部科学省. (2016) 平成28年度公立学校教員採用選考試験実施方法調査

付録 1

アンケート

小学校英語学習に関するアンケート

.....

問 1. 性別：男性 [1] 女性 [2]

問 2. 学年

1 年 2 年 3 年 4 年

[1] [2] [3] [4]

問 3. 英語コミュニケーションレベル

次の英語レベル説明と英検級を参考にご自分の英語力に最も近い番号を選んでマークしてください。

[1] 簡単な会話をゆっくり話してもらっても部分的にしか理解できない。(英検 4－5 級程度)

[2] 短い簡単な英語の読み書き、聞き取りは出来るが、会話は挨拶程度。(英検 3 級程度)

[3] 基礎力はあるが日常の簡単な会話、とぎれとぎれに短い内容の会話が出る程度。(英検準 2 級程度)

[4] 簡単な会話や初歩的な構文なら、要点を理解し、応答も早い。なじみのない話題となるとしても的確な応答が難しい。(英検 2 級程度)

[5] 普通の速さの日常会話や話題が特定分野にわたっても対応出来る。興味のある事柄の読み書き、聞き取り、及び会話は出来る。(英検準 1 級程度以上)

問 4. 海外経験（英語圏）について伺います。

無し 1 か月以下 1 か月～6 ヶ月未満 6 ヶ月～1 年未満 1 年以上

[1] [2] [3] [4] [5]

問 5 から問 10 は、「英語学習」に関する質問です。文を読んで最も当てはまる数字にマークしてください。

とても当てはまる [5]

当てはまる [4]

どちらでもない [3]

余り当てはまらない [2]

全く当てはまらない [1]

問 5. 英語を勉強することがとても好きだ・楽しい。

問 6. 英語を話せる外国人の友達を（沢山）作りたい。

問 7. 英語学習は大切だ。

問 8. 英語が出来るようになり英語圏の国へ行って見たい／住んでみたい。

問 9. 日常生活の中でできるだけ多く英語を使おうと努力している。

問 10. 英語上達の為に最善の努力をしていると言える・努力するつもりだ。

問 11 から問 13 は小学校英語教育に関する質問です。最も当てはまる番号を選んで文を完成させてください。

とても重要である。 [5]

重要である。 [4]

どちらとも言えない。 [3]

余り重要ではない。 [2]

全く重要ではない。 [1]

問 11. 小学校英語教育は、_____

問 12. 外国語活動から教科への移行は、_____

問 13. 小学校教員が英語を指導する為に英語力を高めることは、_____

問14から問40は「外国語活動」もしくは「英語科」において英語学習意欲を高め英語好きな小学生を育てる為に、教員の働き掛けに関する質問です。

その働きかけが意欲を高める為に、重要か重要ではないか、最も当てはまる数字にマークしてください。

とても重要	[5]
重要	[4]
どちらでもない	[3]
余り重要ではない	[2]
全く重要ではない	[1]

(学習環境)

問14. 英語学習への熱意、英語がどのように自分の生活に役に立っているか、実例を挙げて話す。

問15. 教員（ALT含む）と親しく話が出来る環境を作る。

問16. 家庭と連絡を定期的に取り、家庭学習の援助を求める。

問17. 間違えを恐れずに英語を使う事を勧める。

問18. ユーモアを取り入れた授業を行う。

問19. グループ活動を取り入れ、生徒が上手くとけ込めるようにする。

問20. クラス全体で取り組む課題を成功させたり、グループ対抗などの活動を行う。

問21. 楽しくリラックスした雰囲気のあるクラスを作る。

(学習開始時)

問22. 生徒が楽しみそうな英語学習を行い、英語との出会いを肯定的なものにする。

問23. 上級生や仲間の良いお手本や見せたり、体験談を話してもらったりする。

問24. 「英語をしっかりと身につける事が将来役に立つ」と強調する。

問25. 英語使用者や英語文化との触れあいを多くする。

問26. 世界における英語の役割を強調し生徒自身にとっても彼らの社会にとっても英語習得が役に立つ事を話す。

問27. 指導内容を生徒の日常体験や背景に関連づけたものにする。

問28. 目に見える完成品を作り出す活動を行う。

(動機付けを維持し保護する)

問29. 英語力の進歩が目に見えるように様々な催し物を行う。

問30. 学習教材を学習者に関連深いものを使用する。

問31. 授業が単調にならないように変化のある授業を行う。

問32. 現在の英語力よりも少し高い挑戦的で知的好奇心を刺激する課題を行う。

問33. 「できた」「わかった」等、英語学習の成功経験を体験させる。

問34. 難しい課題ではなく、自分の能力にあった課題を行う。

問35. 学習者が「できないこと」ではなく、「できること」に焦点を当てたテストを行う。

問36. 生徒の長所と能力に向け、優れた役割が与えられる活動を行う。

問37. 生徒の比較は避け、競争ではなく協調を促進する。

問38. 努力点も評価に含める。

問39. 透明な評価方法をおこなう。

問40. 進歩に対して報酬を与える。

(受理 平成28年9月8日)